様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月　８ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2018～2020
課題番号：１７Ｈ０６７７３・１９Ｋ２０７５８

研究課題名（和文）タイ現代君主制の維持・発展における王妃と宮中女性の役割

研究課題名（英文）Role of the Queen and the court ladies in Maintaining and Developing the Modern Thai Monarchy

研究代表者
櫻田　智恵（SAKURADA, CHIE）

京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・特任研究員

研究者番号：９０８０８３０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、前タイ国王プーミポンの権威形成において、王妃とその女官が果たした役割を２つの面から明らかにした。
①イメージ戦略においては、王妃に焦点が当たるのは、1960年代の外国訪問以降においてである。さらに、1980年代以降になると王妃単独の行啓も増加する上、国王との行幸啓の場合も別行動を取るなどし、「国母」という語りを強化した。
②人的ネットワークでは、王妃が直接リクルートした若い女官が参内するようになるのは、1970年代半ばころからであったことが明らかになった。この若い女官らは、それ以前の女官らに比べ、新興財閥や軍幹部の子息などと婚姻関係を結ぶことが多く、結婚後も再任官される傾向にある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
王妃や女官といった女性の役割は、タイが上座部仏教の価値観を大きく反映しているがゆえに看過されてきた。また、タイ君主制の維持・強化には人的ネットワークが重要な役割を果たしているにも関わらず、先行研究ではその実態が不明であった。本研究は、宮中の女性という新しい観点を取り入れることで、タイの君主制を支える人的ネットワークの実態を解明でき、タイ地域研究に大きく寄与した。
現在タイでは、王位継承権を持つ男子が少ない。そのため女性王族の公務負担は大きく、女性の王位継承が盛んに議論されてきた。女性皇族の扱いについて議論が活発化しつつある日本に対しても、女性王族の意義を議論する本研究は、有益な知見を提供しうる。

研究成果の概要（英文）：This study identified two main roles played by the queen and her court ladies in establishing the authority of the previous king of Thailand, Bhumibol Adulyadej.(1) For strategy related to depiction by the media, the queen has been the focus in media after royal visits to foreign countries carried out since the 1960s. In addition, the queen's independent provincial visits increased from the 1980s, and on provincial visits with the King, the queen also carried out activities on her own, reinforcing the notion of her role as "Mother of the country."(2) Among her personal network, visits to the palace by young court ladies who the queen directly recruited were found to have started from the mid-1970s. Compared to past court ladies, larger numbers of these young women end up marrying the sons of prominent families such as new financial conglomerates and top military officials, and they tend to be reappointed to the court after marriage as well.

研究分野：地域研究（タイ）

キーワード：タイ　君主制　東南アジア　王妃　イメージ戦略　女官　ネットワーク

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

東南アジア大陸部にあるタイ王国では、君主制が政治経済的・社会的に大きな影響力を持つ。特に、前国王プーミポン・アドゥンヤデート（在位 1946-2016 年）の言葉は絶対であった。誕生日スピーチを通して伝えられる前国王の「お言葉」は人々の生活を方向付け、またそれに沿わない政策を行う政治家は社会的に厳しく糾弾されてきた。2016 年に国王が崩御した際には、喪に服することを意味する黒色の服を着用しない者に対し、街中で暴力的なリンチが加えられることもあった。なぜ、多くの国民は前国王の「お言葉」に従うのか。そうした前国王の絶大な権威は、そのように形成されたのか。

プーミポン国王については、政治的権威を増していく過程について、政治学的な観点から特に多くの研究がなされてきた［e.g.タック・チャロームティアロン.1987.『タイ―独裁的温情主義の政治』］ものの、民衆が国王の「お言葉」に積極的に従う理由については、近年になるまで正面から論じられることが無かった。そうした中で、国王が考案する民衆救済プロジェクト（通称、王室プロジェクト）に着目したチャニダーは、王室プロジェクトの拡大が、前国王がその社会的権威を高めるひとつの要素になったことを明らかにした［Chanida Chitbundid. 2007. *The Royally-Initiated Projects: The Making of King Bhumibol's Royal Hegemony.*］。しかし、これらの研究はいずれも、プーミポン国王や男性役人・政治家・軍人に着目しており、王妃や女官などの女性が果たした役割については看過されてきた。

一方、世界の君主制研究に目を向けると、欧州や日本では女王や王妃／皇后に関する研究が数多くある［e.g. Plunkett, John. 2003. *Queen Victoria: First Media Monarch.*; 原武史. 2015. 『皇后考』］。これらの研究により、女性王族は男性王族に追従する存在ではなく、むしろ一般民衆に対しては女性王族が君主制の求心力を高めるために効果的な役割を果たしたことがわかっている。

タイにおいても、特にプーミポン国王の戴冠直後である 1950-60 年代にかけて、メディアに頻繁に登場したのが王妃であったこと、王妃がタイの文化的象徴であったこと［小泉順子. 2000.「メイド・イン・タイランド:「タイシルク」の来歴に関するノート」］、また平民を母に持ち、海外で生まれ育ったプーミポン前国王に対し、王妃の家系は両親ともに高位王族の家系であることなどから、イメージ戦略や王族内ネットワークの形成に王妃が果たした役割が大きかったと考えられる。

２．研究の目的

本研究では、プーミポン国王の権威形成のためには、王妃シリキットや王妃に仕える女官をはじめとする、宮中の女性が重要な役割を果たしたことを実証する。

具体的には、①プーミポン国王のメディア戦略において王妃が果たした役割、②王妃が持つ王族内の人的ネットワーク、及び女官の姻戚・交友関係を通した王室と政財界の

紐帯の 2 点について分析する。ここから、プーミポン国王の権威を支えたメディア戦略と人的ネットワークという 2 つの柱の全体像を明らかにし、タイにおける現代君主制が維持・発展してきた要因を解明することを目指す。

３．研究の方法

本研究では、主に日本・タイ両国での文献調査、及びニュース映画をはじめとする映像資料調査を行った。当初は聞き取り調査も多く実施する予定であったが、新型コロナウイルスの影響で渡航が困難になったこと、新国王の即位とそれに伴う政治状況の変化によってインタビュイーから調査の見送りを依頼されたことなどから、聞き取り調査は文献調査内容を補足するものとして実施するに留まった。

まず、イメージ戦略について分析するため、王妃の公務を整理した上で、王妃関連の記事が掲載されている雑誌・新聞記事、ニュース映画をはじめとする映像における王妃の表象について分析を行った。

次に、王妃を中心として形成される王族内ネットワークを明らかにすることを目指し、タイにおける有力者の葬儀で配布される『葬式本』の収集・分析を行った。

最後に、王妃の女官が持つ人的ネットワークと政財界の動向の相関を調べるため、『官報』を用いて王妃の女官の人事について整理し、女官の『葬式本』をはじめとする文献調査を行った。

４．研究成果

王妃が「国母」として表象されるようになるのは、70 年代以降であり、それ以前は主に海外メディアからの注目度が高かった。本研究では、欧米諸国に向けて東南アジアの情報を発信する役割を担っていた、シンガポールで発行される英字新聞を中心的に分析した。ここから、タイ王室についての記事は、特に冷戦が激化し始める 1950 年代中頃から増加し、夫婦揃って欧州育ちで「教養が高い」こと、中でも王妃のファッションや容姿への注目度が高い。

この段階では、まだ「国母」の語りは見られず、あくまでも若く美しい点が強調される。しかしながら、タイ国内では 1950 年代からすでに、皇太子らの「母」としての姿がニュース映画をはじめとする映像メディアで大きく扱われている。これが素地となって 70 年代以降の「国母」としての姿に継承されていった。

「国母」の語りが強くなってくるのは、1970 年代後半からである。王妃による地方行幸は、基本的にはプーミポン国王に帯同する形で実施される。特に国王の治世前半にはその傾向が強い。単独での地方行幸が登場するのは、1970 年代半ばからである［図１］。これは、4 月 15 日だった母の日を、王妃シリキットの誕生日である 8 月 12 日に変更したのが 1976 年だからであり、その関連の行事が増加したことが一因である。この「母の日」は、王妃を国民の母として讃える日であり、王妃の公的活動をまとめて展

示したり、母への恩に感謝したりする活動（対象は自分の母でも、国母シリキットでも良い）などが行われるようになった。これは、「父の日」がプーミポン国王の誕生日である 12 月 5 日に定められた 1981 年より 5 年も早く、「国母」の語りが「国父」の語りに先行している。

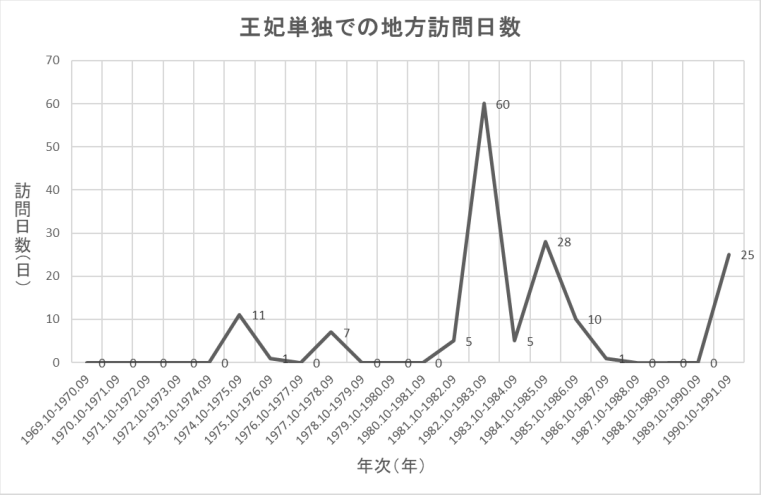

図１　王妃の単独での行啓日数の変遷
［Office of His Majesty's Principal Private Secretary1970-1992 を参照に筆者作成］

王妃単独での行啓が最も多いのは 1980 年代前半であるが、これは国王の体調不良が原因のことが多い。また、1980 年代以降の特徴として、国王と王妃が同じ目的地に足を運び、その場で二手に分かれることが増える。国王は地勢調査に行く一方、王妃は学校などで物品の下賜をする、地元住民と円座を組んで陳情を聞くなどが行われる。これにより、国王が大規模な王室プロジェクトを指揮する強い「父」として行動する一方で、王妃が子どもや女性などに対し、物品の下賜や仕事の視察などを通して国民の生活ぶりに細部まで気を配る優しく民衆に近しい「母」としての語りを強固なものにしていった。

こうしたイメージ戦略に関する分析結果は、2020 年に提出した博士論文『「国王神話」の形成過程：タイ国王の行幸と「陛下の映画」の役割』内でまとめ、発表した。本博士論文は、「第 19 回アジア太平洋研究賞（井植賞）佳作」を受賞した。

次に、女官の人事とそれに伴う姻戚関係については、1970 年代半ばから変化することが明らかになった。本研究では、官報やこれまでのインタビューをもとに、女官の人事について取りまとめを行った。これによれば、女官をはじめとする宮中職員は、1950-1960 年代にはプーミポン国王が即位する以前から続く人脈を基礎として登用される傾向にあったが、1970 年代以降は、特に王妃が大学等の視察の際に直接「お声がけ」したのがきっかけで参内する者が現れるなど、広く様々な人々が宮中職員になっていった。彼女らは、それ以前の職員に比べて一度退職して結婚・出産を経た後、再任官されることも多く、より重要な役割を担っていたと考えられる。これらの成果は、研究会等で発表した他、次の研究テーマとして王妃以外の王族女性に焦点をあてる必要性を浮かび上がらせるなど、重要な知見となった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 櫻田智恵	４．巻 －
２．論文標題 岐路に立つタイ王室――難航するメディア戦略、揺らぐ「タイ式民主主義」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 IDEスクエア「世界を見る眼」	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 櫻田智恵	４．巻 2021年2月号
２．論文標題 「タイ式民主主義」の分水嶺 やがて迫られる日本の決断	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Wedge ウェッジ	６．最初と最後の頁 68-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　4件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 櫻田智恵
２．発表標題 「国王神話」の形成：タイ国王の地方行幸と「陛下の映画」にみる奉迎の場の創出
３．学会等名 東南アジア学会関東例会（オンライン）
４．発表年 2020年

１．発表者名 櫻田智恵
２．発表標題 事前学習編1 「タイってどんなところ？」
３．学会等名 北海道教育大学 函館校 国際地域学科 国際地域学 ハイブリッド型プログラム（オンライン）（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 櫻田智恵
２．発表標題 事前学習編2 「タイにとって王室とは？」
３．学会等名 北海道教育大学 函館校 国際地域学科 国際地域学 ハイブリッド型プログラム（オンライン）（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 櫻田智恵
２．発表標題 事前学習編3 「タイ語を使ってみよう！」
３．学会等名 北海道教育大学 函館校 国際地域学科 国際地域学 ハイブリッド型プログラム（オンライン）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 櫻田智恵
２．発表標題 「陛下の映画」の宣伝広告とその効果
３．学会等名 タイ王室映画におけるメディア戦略と王妃の役割に関する研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 櫻田智恵
２．発表標題 「国王神話」の形成：タイ国王の地方行幸と「陛下の映画」にみる奉迎の場の創出
３．学会等名 東南アジア学会関西地区例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 櫻田智恵
２．発表標題 新国王即位後のタイ王室のメディア展開
３．学会等名 「グローバル時代のアジアにおける君主制」研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 櫻田智恵
２．発表標題 巷に溢れる王様の肖像：タイの「お父さま」が果たす役割
３．学会等名 かわさき市民アカデミー2018年度後期政治・社会講座『君主制の比較政治論』（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 櫻田智恵
２．発表標題 タイの君主制：タイ式立憲君主／タイ式民主主義とは
３．学会等名 早稲田大学イスラーム地域研究機構研究会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 櫻田智恵	４．発行年 2019年
２．出版社 京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科	５．総ページ数 240
３．書名 学位請求論文『「国王神話の形成過程：タイ国王の行幸と「陛下の映画」の役割』	

１．著者名 水島治郎、君塚直隆 編著	４．発行年 2018年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 312
３．書名 現代世界の陛下たち	

１．著者名 公益財団法人 笹川平和財団 編	４．発行年 2018年
２．出版社 イースト・プレス	５．総ページ数 336
３．書名 アジアに生きるイスラーム	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関